

千客万来の社交都市・ロンドン 民活・地方分権(自治)で都市創生・活性化(その2) ー寛容の精神と開放的な文化風土が多くの人々に活躍の舞台を提供、クリエイティブな都市へー

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

3. 産業都市の整備

(1) 都市の近代化

・人口・産業の集中

18世紀半ばから19世紀にかけ、**産業革命**の進行をうけ工業化が進展、1831-1925年代のイギリスは**世界の工場**として機能する。そして海外との間で商業・貿易活動が活発化し、中継ぎ貿易港としてロンドン港の荷役作業がスピードアップされると、**金融・保険業務**等の中枢機能がアムステルダムからロンドンへと移ってくる。

この経済の隆盛に伴いロンドンには、地方や外国から雇用や所得を求め膨大な数の人口が流入、これを受け都市は、さらに活動力を高め巨大な富を蓄積するとともに、豊かな中産階級を誕生させる。この間、ロンドンの人口は爆発的に増加、1801年に86万人であったものが、1851年には232万人、1901年には650万人を数え、この時期としては世界最大の都市となる。

この時期、ロンドンには、産業革命の成果として1836年に蒸気機関を取り入れ、**機関車が営業運転を開始**する。また、**ガス灯も設置**され街が明るくなると、都市活動は空間的に広がるだけでなく、夜間にも及ぶようになる。1855年には、首都建設委員会が設立され、道路、公園、下水道等のインフラの整備が促進される。さらに1863年には世界初の公共鉄道網として、ロンドン地下鉄「**TUBE**」も**開通**する。この時期、市内交通として、乗合馬車が4,600台活躍していた。

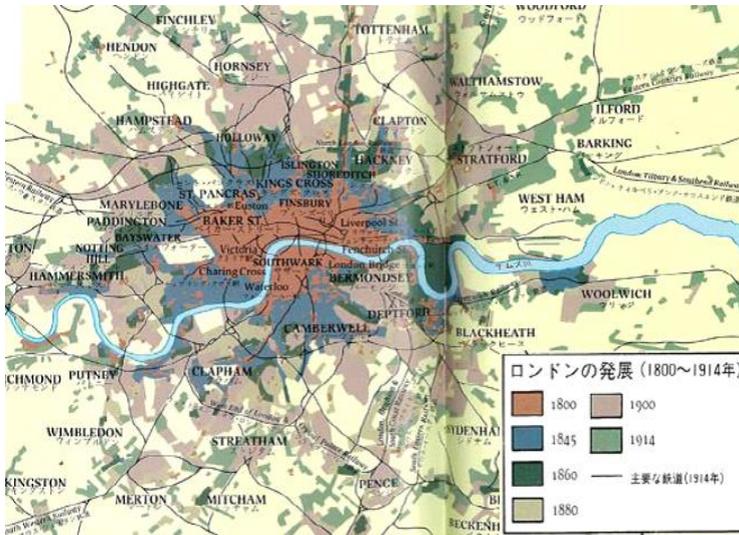
・公衆衛生の確保

しかし、その一方、市街には工場が進出し住宅との間で用途が混在、建込みも進み**騒音・振動**、**悪臭**などで劣悪な居住環境を呈するようになる。また、工場の煙害だけでなく暖房用の石炭の煤と、この地特有の深い霧とが相まって**大気汚染**が進行、家庭などから排出される汚水や路上の馬糞また工場の廃液なども加わり、ロンドンの生活環境はかなりひどい状態となった。そうした状況をふまえ上水道は1829年から、また下水道は1855年から整備が始まるが、飲料水となる原水は汚濁し悪臭の漂うテムズ川から取り入れられていたため、チフスやコレラなどが流行、健康被害が広がっていった。

こうした状況を目のあたりにした**エベネザー・ハワード**は、「人間らしく暮らすには、田園の良好な環境と都市の利便性とを兼ね備えた街や住まいが必要」と考え、1898年に「**田園都市構想**」を提示、自らレッチワース、ウェルウィンにおいて新都市の建設に入る。この考え方は、大都市郊外の整備にも影響を与えていく。

「地方創生」支援プロジェクト



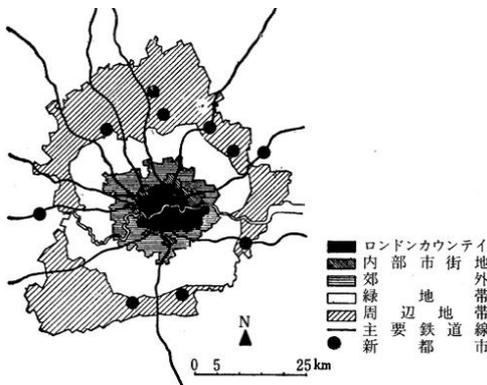


19世紀ロンドンの市街地の拡大 ヒュー・クラウト編「ロンドン歴史地図」 近世風の街並み(道の中央に排水溝)

こうした動きと相前後して、1875年に**公衆衛生法**(自治体毎に建築規制し、低位な背割長屋を抑制)、また1894年には**ロンドン建築法**が制定され、市内の建物は**絶対高さ100フィート**(約30m)、軒高80フィートに規制される。これは当時の消火活動能力の限界ということで決まった。さらに、1909年には**住居・都市計画法**が制定され、住環境の改善に向け対応がとられていく。

○大都市ロンドンの整備

第二次世界大戦においてロンドンには、ドイツ軍の空爆をうけ市内の建物の多くが破壊され、市民3万人が死亡する。戦後、1947年、ロンドンはGLC(大ロンドン委員会)より提案された、**グリーンベルト構想**の具体化に入る。これは市街地の無秩序なスプロールを抑制するため、都心から20~30km圏に農地や森林、牧草地や公園などの緑地帯を配置し、開発を抑制したうえで、中心部は建物の中高層化を進め密度高く利用、郊外部は低層建物を中心にニュータウンなどを育成・整備し、低密度な市街を形成しようとするものである。



大ロンドン計画



ハイドパーク



アスコット競馬場(緑地帯内)

「地方創生」支援プロジェクト



・市街

そうして整備されたロンドンの街は、パリと比べると道路幅の割に建物は低く、まち全体的に開放的な雰囲気がある。また、郊外に向かうと、東京のように徐々に閑散となっていく。なお、中心市街シティは建物がぎっしり詰って建っている。ロンドンでは基本的に商人の自治都市で、後から王権が立地し併存する形で首都となったまちである。今でも王権と市民代表としての商人との間には、相互依存関係がある。

中心市街のシティは、現在もロンドンの金融中心をなしている。ウェスト・エンドは、ロンドンのエンターテイメントやショッピングの中心地区で、ピカデリーサーカスやコベントガーデンなどは毎日、多くの観光客で賑わっている。また、ハイドパークを中心としたウェスト・ロンドンでは、伝統的に品の良い住宅街を形成している。一方、イーストエンドは旧ロンドン港に近く、都市発展の早い時期から移民が多く住み、市内でも貧しい地区の一つとされてきた。しかし、昨今、ドックランズにあるカナリー・ワーフで近代建築による再開発が進み、まちは新たな金融・商業の核を形成するようになっている。北東部はロンドンで初期に工業開発が行われた地域であるが、近年、2012年のロンドン・オリンピック開催に伴い再開発が進み、オリンピックパークを中心に市街の更新が進んでいる。

・交通

ロンドンの地下鉄は、通称“チューブ”とも呼ばれ、1863年に開通した世界最古の地下鉄である。現在、13路線、275駅、総延長400kmを誇り、一日に300万人以上の人々が利用している。地下鉄路線のほとんどは、郊外からセントラル・ロンドンへ接続しており、地理的歴史的背景もあり南部(地上輸送の鉄道が整備されている。)より、住宅地として人気の高い北部に重点を置いて整備されており、都心部への通勤客等の輸送において重要な役割を果たしている。運賃は、ゾーン制(9ゾーン)をとっており、ピーク時とオフピーク時とは異なっている。現金で切符を購入し乗車する場合、最低4.8ポンド(700円強)必要となる。

ロンドンのバスは、ロンドン交通局の附属機関である**ロンドンバス会社**が、グレーターロンドン(大ロンドン市)市内で運営しており、入札で選ばれた10の会社が運行している。市内を拠点に走る全ての路線バスは、基本的に赤色のボディを有し、現在、600超の路線で8,000台を超えるバスが運行されており、バスの輸送管理機関としては世界最大規模である。路線バスは平日、主要路線の場合、午前5時台には運行を開始、午前1時近くまで運行している。このほかにナイトバスがあり、午前1～5時頃まで運行している。料金は昼間と変わらない。運行間隔は1時間に1～2本である。運賃は一律で乗車一回につき2.3ポンド(350円ほど)である。オイスターカードを用いると、料金は地下鉄、バスともに半額程度になる。

これはロンドン交通局が徴収権を持つ、**コンジェスチョン・チャージ渋滞税**(「混雑税」ともいわれ、自動車がロンドン都心地区に乗り入れると課金される。)と駐車違反金(警察発行の切符に限る)

「地方創生」支援プロジェクト



がバス経営の資金として投入されているためである。



ロンドン地下鉄網図



ロンドン地下鉄・チューブ

・建物

さて、ロンドンには、様々な年代の建物が存在し、街の表情は多様である。もちろんこれらの建物を使う住民やビジネスマン、そして観光客からも世界各国から集い多種多様である。ロンドンの古い建物は主に石や煉瓦で造られていて、その多くは黄色っぽいロンドンストック煉瓦か、明るいオレンジまたは赤系統で彩色され、彫刻やプラスターの線形が施されている。

ロンドンにある建物は、一見古く見えるが、その多くは建設→増築・修復→破壊→再建を繰り返しており、再建にあたっては、その素材や色彩など外観コントロールがなされ、かつてのデザイン・イメージが継承されるようになっており、単に保存され残っているわけではない。

また、ロンドンは地域により建物の密集度に差がある。セントラル・ロンドンには就業人口の高い集積がみられ、インナー・ロンドンの中でも住宅密度が高い。逆に、アウター・ロンドンでは低い。市内の建物が密集する地域には中・高層ビルも建っており、シティやカナリーワーフなど金融街には超高層ビルもある。しかし、高層ビルの建築は、**セント・ポール大聖堂**や**国会議事堂**など歴史的建築物に対する**眺望景観**を確保するため、その立地が制限されている。ヨーロッパで一番高い超高層ビル「ザ・シャード (310m)」は、ロンドン・ブリッジの南側にある。

・公園

セントラル・ロンドンで一番大きな公園は、**ハイド・パーク**で面積は1.416 km²、サーペンタイン・レイクにより敷地が二分され、西隣のケンジントン・ガーデンズと一体的に構成されているため、全体がハイド・パークとよく間違えられる。ハイド・パークはロンドンのスポーツ・スポットとしても有名で、野外コンサートも催される。

また、その北側にはリージェント・パークが位置し、ここには世界で一番古いロンドン動物園がある。近くには観光名所・蝸人形館のマダム・タッソー館も立地している。さらに、セントラル・ロンドンから一歩外へ足を踏み出すと、多くの大公園が広がっている。南東部にはグリニッジ・パーク、南西部にはブッシー・パークやリッチモンド・パーク、そして東部にはヴィクトリア・パークがある。

「地方創生」支援プロジェクト



○イギリスの土地所有制

ここで都市づくりを進めるうえで重要な要素である、土地所有の状況について紹介しよう。イギリスでは王家や大貴族が、地主として多くの土地を所有しており(フリーホルダー)、これを地主自ら又は **999 年のリース** で小貴族や大企業が借り受け、開発、事業を展開する形で街が開かれている。こうして整備された土地や建物を、さらに企業、個人が **99 年間のリース** で借り、ビルや住宅を建設しテナントに貸し出し収益を収めている。これは「**定期借地権**」のような仕組みで、地主は金銭的負担なしに土地を開発し、一定の賃貸料を得て土地の価値を上げている。最近では、借用人や居住者が物件を維持する場合などは、その権限が拡大されてきているが、地主たちの既得権益は大きく多くの利益を得ている。ロンドンの中心街シティの土地所有状況をみると、金融街の主だったところは、ポルトガル貴族・ブラガンサ家、英国ウェストミンスター公爵・グロブナー家によって「所有」されていることがわかる。

また、ロンドン屈指の高級住宅街メイフェアやベルグラビア地区は、**300 年**ほど前からグロブナー家が所有している。そしてセンスの良いセレクトショップが集まる高級住宅街のチェルシー地区、その北に位置するブランド店や高級デパート・ハロッズが建ち並ぶナイツブリッジ地区はカドガン家、世界的な知名度を誇るマドンナやポール・マッカートニーなど有名人が邸宅を構えるマリンボーン地区や、腕利きのプライベート・ドクターが診療所を構えるハーレー・ストリート地区はハワード・ドゥ・ウォールデン家、巨大なデパートが林立する繁華なショッピング街でトレンドの発信地でもあるオックスフォード・ストリートはポートマン家、といった具合に土地が所有されている。

このように貴族(800 家弱。貴族院の議員になれる資格がある。しかし、無報酬。)が長いこと土地を所有し続けられるのは、相続法の存在がある。イギリスでは地主が死亡した場合、長子が相続する権利が認められている。また、イギリスの爵位は、家系ではなく土地所有者に対し与えられる。そんなこともあり大土地所有者である貴族が地主として存続、イギリス**階級社会**の基礎を形づくっている。

(2) ロンドンの文化的特性 社交性、多種多様性

イギリスには紀元前 7 世紀頃からケルト人、紀元前 1 世紀頃にはローマ人、5 世紀にはアングロ・サクソン人、そして 11 世紀にはノルマン人と、近代化以前からも続々と様々な人々が流入、その地に生きる人種・民族に接ぎ木をするようにして、人口の集積が進んでいった。そして大航海時代に、世界の 7 つの海に覇を唱えると、アフリカ、アジア、カリブなど英連邦加盟国(ジャマイカ、インド、バングラデシュ、パキスタンなど)などから、多くの人々が移住してきた。

そうして今日では世界 300 の言語が話される、多人種多民族多言語多文化の複合国家を形成している。とりわけロンドンは、その象徴的存在としてあり、現在、白人の数は半数を割り込んでいる。こうして紀元前から続くイギリス、**ロンドンへの移民の流入**は、今日、ロンドンを世界

「地方創生」支援プロジェクト



でも屈指の**多様性を備えた複合都市**としている。

ロンドンの人口は約 860 万人（都市圏（グレーターロンドンとその周辺）人口は約 1,500 万人）で今日、芸術、商業、教育、娯楽、ファッション、金融、メディア、専門サービス、研究開発、観光、交通など広範な分野にわたり、世界に強い影響力を及ぼしている。中でも、**金融・不動産、教育・文化、娯楽・交流のセンター**としての役割は大きい。その要因としては、**世界人口の内 5 億 3 千万人もの人々の間で、英語が話されている**ことが大きく影響している。

ロンドンには、世界で最も高等教育機関が集積する都市で、現在、市内には 43 の大学が立地し、世界の各地から様々な人々が留学している。また、ギルドの流れを受け、シティを中心に市内には**多数の美術館、博物館**が存在、これらの施設は基本的に**入場無料**（志による寄付で対応）で、興味や所得に応じ多彩に知的な生活を楽しめるようになっている。さらに、各地の劇場・ホール、ライブハウスではコンサート、ミュージカル、オペラなどの上演頻度も高く、好みに応じチョイスできる。そしてスポーツもクラブ制度の下でよく発達し、テニスをはじめ、サッカー、ラグビー、馬術等々、様々に隆盛をみている。スポーツのメインイベントともいべきオリンピックも、1908 年、1948 年、2012 年と 3 度も開催され、世界一の開催頻度を誇っている。とにかくロンドンは文化が豊かである。

○ビジターシティ 世界都市(複合型のグローバルシティ)

昨今は世界の金融中心・シティやカナリーワープでも、世界各国からやってきたビジネスマンが活躍する姿が目につく、またビジネスマンだけでなく教育・文化、娯楽・観光といった各分野でも多くの人々が活躍しており、ロンドンは複合型のグローバルシティとなっている。そのロンドンを特徴づける最たるものは、「**外国人来訪者**」の多さである。ビジネスに学術そして観光にと、**様々な目的で人々はこの地を訪れており、その数は世界で最も多い。**

前述したとおり、ロンドンは遙か昔から人種、民族が遷移・交錯しており、大航海時代を経ての産業都市の建設、そして**文化成熟時代**の今日の**社交都市の形成**に至るまで、多くの移民（難民含め）を受け入れ続けてきた長い歴史がある。人々が多数集う娯楽文化の殿堂・ピカデリーサーカスに佇むと、人々の交わす言語の多さから、どこの国にいるのかさえわからなくなる。そんな多彩な人々との出会いと交流、そしてそれらの人々の自由で活発な活動を支える、**寛容さと開放性にあふれる文化的風土**がロンドンにはある。

こうした状況を反映し、グローバルシティ・ロンドンには、ヒースロー始め**5 つの国際空港**が整備されており、年間発着回数は約 115 万回、年間の利用者数も 137 百万人と、都市圏としてみた場合、**世界で最も航空旅客数が多い。**また、パリとの間には近年、**鉄道路線**が開設され、トンネルを介しユーロスター(TGV)により 2 時間半で結ばれている。また、ロンドンは 24 時間都市として機能しており、これを支えるべく市内にはブラック・キャブのほか赤色の 2 階建てバス、それに地下鉄・チューブが間断なく運行されている。

「地方創生」支援プロジェクト





ピカデリーサーカス



近世イギリス、コーヒーハウス

それでは、千客万来の**社交都市**「ロンドン」を性格づける、いくつかの施設を紹介しよう。

・パブ

まず、その筆頭に挙げられるのが「パブ」である。パブは、国内のそこかしこにあり、その数は実に5万数千店を数える。我が国の神社の数(88,000)やコンビニの数(52,000)と比べてみても(イギリスの人口規模は我が国の約半分である)、その数の多さがわかろうというものである。

パブは、「パブリック・ハウス」の略語で、12世紀に、その原型ができ、18世紀から19世紀にかけて労働者の余暇の場として発達した。ロンドンでは、パブの多くは、室内にカウンター席と椅子席があり、ビールやその他の酒類を提供している。利用客は成人男性中心であるが、老若を問わず社交の場として親しまれている。

・コーヒーハウス

次に、コーヒー・ハウス (Coffeehouse) を取りあげよう。コーヒー・ハウスはイスタンブールからウィーンなどを経て、1652年にロンドンに初めて開店、17世紀半ばから18世紀にかけて大いに流行した(その数は1683年に約3,000、1714年に約8,000に達した。)。ここの特徴は酒を出さないことにある。コーヒーを飲み、たばこをくゆらせながら、当時発刊されたばかりの新聞や雑誌を読んだり、客同士で政治談議や世間話に花を咲かせる所で、近代市民社会を支える世論形成の上で重要な役割を果たすと同時に、イギリス民主主義発展の基盤をなした。

また、コーヒー・ハウスは、情報収集の場としても大変重要な役割を果たした。有名なギャラウェイ・コーヒー・ハウスは、17世紀中頃、シティの取引所の近くに開かれたこともあり、多くの商人が情報を求め集った。また、1688年成立のロイズ・コーヒー・ハウスは、船主たちが多く集うことから、船舶情報を載せた「ロイズ・ニュース」を発行するようになった。やがてこの店は、船主たちのリスク回避のニーズに応え、船舶保険業務を取り扱うことになる。これが今日のロイズ保険会社の起源である。

・ティーハウス

しかし、人々の趣向が「コーヒー」から「茶(インドからアッサム茶を輸入)」へと変化すると、アフタヌーン・ティー・ハウスができる。19世紀に入り**照明が油から電気へと変わり**、**都市の活動時間が夜間にまで延びると**、ホテルの洒落た喫茶店などで、午後にお茶とあわせ軽い食事(サンドイッチ、スイーツなど)を摂るようになる。これは伯爵夫人の発案で、この頃から食事の摂取も**一日三食**となっていく。この「ホテル」という施設、19世紀も半ばを過ぎる頃、国内

「地方創生」支援プロジェクト



外からの訪問客が増大したことをうけ、ロンドンに出現したものである。

ロンドンには、多くの人々を市街に收容するだけでなく、夜間に向けても人々の活動の場を広げていった。こうして需要の増大をうけ一日の活動時間が延びると、産業経済も生産拡大の一途を辿り、投入される資本も得る利潤も膨らんでいった。そうしてイギリスは名実ともに**大英帝国**として世界に君臨するようになり、1900年前後にロンドンの人口は約**650万人**に達する。

・クラブ

もう一つの社交場、クラブ（会員制）は17世紀、フライデー通りに共通の趣味・話題などを持つ上流階級の男達が、コーヒーハウスの一室を借り定期的に集会を開いたことに始まる。クラブは、18世紀、産業革命により**中産市民階級が勃興**すると、**コーヒーハウスから独立**し隆盛をみ、次第に女性も参画するようになる。テーマも政治、文学、芸術、スポーツなど多方面に及ぶ。19世紀に入ると、経済発展に伴う労働時間の短縮・余暇時間の拡大を背景に、クラブ組織が伸長しスポーツクラブなどが繁栄をみる。

なお、クラブのうちには、中世のギルド（商工業者組合として職業別に技術教育や技能振興等を目的に組織され、（最盛期100近くの団体があったといわれる）のち慈善活動や冠婚葬祭、労働福祉にまで、その活動分野が拡大した。）の流れをくみ、博物館の運営など文化事業団体として活動したり、また王家のコレクションを管理運営するものもある。ロンドン動物園（ロンドン動物学協会付属）もはじめは会員制として発足した。

（その3に続く）

参考資料

歴史上の推定都市人口:ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ロンドン:ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

小池滋:世界の都市の物語ロンドン,(株)文芸春秋社,1992

小池滋:世界の歴史と文化「イギリス」,(株)新潮社,1992

小林章夫:ロンドン都市物語,(株)河出書房新社,199

見市雅俊:講談社選書メチェ「ロンドン 炎が生んだ世界都市」,(株)講談社,1999

小林章夫:ロンドンシティ物語,(株)東洋経済新報社,2000

ロンドン駐在員事務所:ロンドンの都市競争力戦略-混雑税の導入を通して-,日本政策投資銀行,2005

編:ケン・リビングストン訳:ロンドンプラン研究会「ロンドンプラン-グレーター・ロンドンの空間開発戦略-」,都市出版(株),2005

岡村祐:英国ロンドンにおける眺望景観保全施策の新展開,日本建築学会大会学術講演梗概集 pp855-856,2008

渡邊研司:図説「ロンドン 都市と建築の歴史」,河出書房新社,2009

近藤和彦:岩波新書 1464「イギリス史 10 講」,(株)岩波書店,2013

名古屋都市センター:眺望景観の保全施策,平成 26 年度 NUC レポート No.018,名古屋都市センター,2015

「地方創生」支援プロジェクト



指昭博:図説「イギリスの歴史」, 河出書房新社,2015

掲載写真等

イギリスの地形 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ウェストミンスター宮殿 https://ja.wikipedia.org/wiki

1300年頃、シティ <https://upload.wikimedia.org/wikipedia>

大航海時代以前の世界図 <http://www.script1.sakura.ne.jp/>

議会指導者クロムウェル <http://manapedia.jp/>

ジェニー紡織機 <http://tamatanikki.sblo.jp/>

大航海時代の船団 <http://blogs.yahoo.co.jp/>

17世紀のグローブ座復元 <http://www.japanjournals.com/>

ロンドン大火 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

19世紀ロンドンの市街地の拡大 ヒュー・クラウト編「ロンドン歴史地図」 <http://www.ichiura.co.jp/>

近世風の街並み(道の中央に排水溝) <http://media-cdn.tripadvisor.com/>

大ロンドン計画 <http://toshi1.civil.saga-u.ac.jp/>

ハイドパーク <http://smartrip.jp/> <http://taptrip.jp/>

アスコット競馬場 <http://mobell.hatenablog.com/>

ロンドン地下鉄網図 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ロンドン地下鉄・チューブ <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ピカデリーサーカス <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/>

近世イギリス、コーヒーハウス <http://yamatake19.exblog.jp/>

ビートルズ <https://www.bing.com/>

ウィンブルドンテニスコート <http://image.search.yahoo.co.jp/>

ドックランズ、カナリーワーフ <http://london.navi.com/>

大ロンドン、土地利用と高速道路網図 <http://blog.goo.ne.jp/>

ロンドン混雑税・課金区域 <http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/>

ミレニアム・ビレッジ 小学校&コミュニティセンター

<https://www.machinami.or.jp/>

共同住宅 <http://kinoie-saijou.seesaa.net/>

シティ・オブ・ロンドンの景観 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ロンドンの眺望景観の規制 City of Westminster 1994

「地方創生」支援プロジェクト

